

留学生と国際比較研究のためのワークショップ
グローバルな視点からみる日本の社会福祉学
-海外の社会福祉教育・研究事情と留学生から教員への歩みを考える-

日時 2025年10月5日(日) 9:30-12:00

場所 同志社大学(今出川キャンパス・良心館)

<概要>

日本における社会福祉学の学びは、国内外の多様な背景を持つ人々によって支えられ、発展を続けてきました。そこで本企画では、国際的な多様性を踏まえつつ、北欧のソーシャルワーク教育・実践、海外からの留学生が研究者になるまでの道のりなどについて考えてみたいと思います。

本企画の目的としては、1)北欧(デンマーク)から講師をお招きし、社会福祉教育・研究事情についてお話を伺うことで、日本の社会福祉学(教育・研究面)を振り返る機会を提供すること、2)社会福祉学を学ぶために日本に留学した経験をもつ教員をお招きし、実際に日本で教員として活躍するまでの過程や現状の課題等についてお話を伺うことで、現在の留学生が抱える不安の軽減・解消や将来設計に向けたヒントを提供することを意図しています。また、3)日本で教員を目指す留学生だけではなく、すでに留学生への研究指導に取り組んでいる教員等にとっても、貴重なインスピレーションを提供できる機会になれば幸いです。みなさまの積極的なご参加をお待ちしております。

(国際学術交流促進委員会 委員長 本郷秀和)

スケジュール(予定)

【9:30~10:40】開会挨拶・第Ⅰ部

(1)開会挨拶 / 本郷 秀和(国際学術交流促進委員会・委員長(日本社会福祉学会・副会長))
説明・登壇者紹介等(司会・コーディネーター)

(2)基調講演:「北欧の視点から見た社会福祉教育と研究: グローバルな未来への洞察」

Nordic Perspectives on Social Welfare Education and Research: Insights for a Global

講演者: ミレナ・バスクニャン・スカールプ氏 Milena Bascuñan Skaarup

北欧ソーシャルワーク教育学会理事・前会長、ユニバーシティー・カレッジ・コペンハーゲン

通訳・翻訳: 松尾敬子(神戸大学国際交流コーディネーター/元国連職員)

【10:45~11:35】第Ⅱ部

(1)シンポジウム 「社会福祉に関する教育・研究事情 -留学生支援に向けた課題を含めて-」

登壇者紹介(司会・コーディネーター) ※報告①のみオンデマンド配信

報告①: ヴィラーグ ヴィクトル(日本社会事業大学・准教授、国際学術交流促進委員会・委員)

報告②: 楊 慧敏(県立広島大学・助教、国際学術交流促進委員会・委員)

報告③: 姜 民護(関西大学・准教授、国際学術交流促進委員会・委員)

【11:35~12:00】第Ⅲ部・閉会挨拶

(1)全体に関する質疑応答

(2)コメンテーターによるまとめ

(3)閉会挨拶 / 荒井 浩道(国際学術交流促進委員会・副委員長(担当理事))

※ 時間は目安です。進行状況により多少前後する場合があります。

I 部：基調講演 講演者
ミレナ・バスクニャン・スカールプ先生のプロフィール

ミレナ・バスクニャン・スカールプ
Milena Bascunan Skaarup 氏
(北欧ソーシャルワーク教育学会理事・前会長、ユニバーシティ・カレッジ・コペンハーゲン)

経 歴

2012年 ユニバーシティ・カレッジ・コペンハーゲン国際・異文化間ソーシャルワーク学士
2012年～2013年 バレウップ市ソーシャルワーカー
2017年 ルンド大学ジェンダー研究・ソーシャルワーク修士
2019年～2023年 レーデン・インターナショナル（トラフィッキング犠牲者支援NGO）所長
2023年～2025年 北欧ソーシャルワーク教育協会代表
2023年～現在 ユニバーシティ・カレッジ・コペンハーゲン ソーシャルワーク学士課程長

研究分野

キーワード及び主な研究活動：
- 高等教育におけるリーダーシップ・戦略
- インクルーシブで実践志向のソーシャルワーク教育
- 大学と現場及び市民社会の部門間協力
- ソーシャルワーク教育の国際化及び人的交流

主な著書・論文等

論文等：
Odgaard, J. & Bascuñan Skaarup, M. (2024). Sexuality, Gender and Social Work.
Social Critique - Journal for Social Analysis and Debate, No. 172, September 2024
Publications and contributions
Development reports and policy contributions in the field of education and anti-
trafficking

報告内容の概要

本基調講演では、専門性の強化と学術的正当性の高まりについて、北欧の情熱的な先駆者たちから専門職化への道程を語る。北欧では、ソーシャルワーク研究は教育と実践にとって不可欠な対等な存在として認知されてきた。ノルウェーとスウェーデンでは早期にソーシャルワークを大学に統合し、教育と研究の並行発展を可能にした。デンマークでは研究基盤の確立が遅れた。フィンランドでは大学を基盤とし、全国的な研究が教育と博士レベルの研究発展の両方を展開している。こうした北欧のソーシャルワーク教育がアクティビズムと専門性、実践と研究、地域の伝統と国際基準をいかに調和させるかについて考察する。

Ⅱ部：シンポジウム企画 報告者① ヴィラーグ ヴィクトル先生のプロフィール

ヴィラーグ ヴィクトル
VIRAG Viktor 氏(日本社会事業大学・准教授、国際学術交流促進委員会・委員)

経 歴

2022年4月 日本社会事業大学・准教授（現福祉計画学科長）、博士（社会福祉学）
2020年7月 日本ソーシャルワーク学会・理事（研究推進第2委員会委員、国際委員会委員）
2021年5月 日本ソーシャルワーカー協会・理事（国際委員会副委員長、倫理委員会委員）
2022年8月 国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）アジア太平洋地域・財務担当（執行委員）
2023年5月 国際ソーシャルワーク協会・理事（設立社員）
2023年8月 日本社会福祉教育学会・理事
他：日本ソーシャルワーカー連盟と日本ソーシャルワーク教育学校連盟にて国際委員会委員

研究分野

キーワード：ソーシャルワーク理論、多様性、社会福祉教育、国際福祉論
主な研究活動：特に文化や性の多様性に焦点を当てながら、ソーシャルワーク理論・実践と社会福祉教育及び制度を中心に国内外で研究を展開

主な著書・論文等

著書：2018『多様性時代のソーシャルワーク』中央法規（単著）／2020『Strengthening Recognition of the Importance of Human Relationships』IFSW（分担）／2021『介護・福祉の現場でともに学び、働くための外国人スタッフの理解』中央法規（単著）／2022『国際ソーシャルワークを知る』中央法規（分担）／2022『Remaking Social Work for the New Global Era』Springer（分担）／2025『エンサイクロペディア社会福祉学』中央法規（分担）／2025『Professional Social Work Education in the Asia Pacific Region』IFSW（共編著）／2025『Social Work Professional Organizations』Policy Press（分担）、その他

報告内容の概要

前半では、経歴についてまとめる。第一に、生まれ育ったハンガリーから日本への留学に至った経緯と、学問分野として社会福祉学・ソーシャルワークに辿り着いた過程について整理する。次に、現職までの教育活動について振り返る。それを踏まえて、学士論文から現在まで従事してきた主な研究について紹介する。

後半では、社会福祉・ソーシャルワーク業界における活動について述べる。最初に、国内外の専門職団体、とりわけ専門職団体と専門職教育・養成課程における活動を取り上げる。そして、学会活動についても触れる。

Ⅱ部：シンポジウム企画 報告者②
楊 慧敏先生のプロフィール

ヨウ ケイビン
楊 慧敏 氏(県立広島大学・助教、国際学術交流促進委員会・委員)

経 歴

職歴

2022年4月-2023年3月 同志社大学大学院社会学研究科・留学生助手、博士（社会福祉学）
2023年4月-現在に至る 県立広島大学保健福祉学部人間福祉学コース・助教
2023年4月-現在に至る 大阪公立大学都市科学・防災研究センター・客員研究員

委員歴

2022年5月-現在に至る 日本社会福祉学会・国際学術交流委員会、委員
2023年8月-現在に至る 滋賀県大津市障害者地域生活支援拠点運営委員
2023年4月-2025年3月 包摂都市ネットワーク・ジャパン事務局
2025年4月-現在に至る 包摂都市ネットワーク・ジャパン機関紙編集委員

受賞歴

2023年12月 同志社大学社会福祉学会・学術研究部門社会福祉研究賞 受賞
2024年6月 県立広島大学保健福祉学部・優秀論文賞 受賞

研究分野

キーワード：

介護保険制度、ヤングケアラー、東アジア3か国（日本・中国・韓国）

主な研究活動：

- ・中国における構築可能かつ持続施行可能な制度枠組みの検討。
- ・東アジア3か国（日本・韓国・中国）のヤングケアラーのニーズに対応できる支援の実践モデル構築の検討。

主な著書・論文等

著書：

楊慧敏(2023)『中国の介護保険構想：持続可能な制度構築へ向けた政策分析』明石書店。
楊慧敏(2023)「第5章 映画から読み取る中国の社会保障の変遷」全泓奎編(2023)『映画で読み解く東アジア：社会に広がる分断と格差』明石書店。
埋橋孝文・楊慧敏・孫琳(2022)「第1章 日本における社会保障制度の所得再分配機能—カクワニ係数を用いて」埋橋孝文編(2022)『福祉政策研究入門—評価と指標Ⅱ 格差と不利/困難のなかの福祉政策』明石書店。

論文等：

楊慧敏(2018)「中国における介護保険パイロット事業の展開：財政システムの分析から」『同志社社会福祉学』32, 70-83。
楊慧敏(2021)「中国の介護保険パイロット事業の課題」『Int' lecowk（国際経済労働研究所）』1112, 11-18。
楊慧敏(2023)「ヤングケアラーの支援体制の問題点—類型化の分析を通して—」『社会政策』15(1), 89-101。
楊慧敏(2025)「中国における少子化対策と現実の乖離」『インクルーシブシティ』4, 59-64。その他。

報告内容の概要

本報告では、報告者のこれまでの経歴を振り返りながら、以下の3点を共有する。

第一に、日本留学のきっかけと研究関心である。脳梗塞で右半身が不自由になった祖父の在宅介護をめぐる本人および家族のつらさを目の当たりにした報告者は、「自分にできることは何か」という問いを胸に刻みつけ、これが福祉への道を志す礎となった。大学では日本語と社会福祉の基礎知識を学んだ後、日本に留学し、大学院に進学した。研究関心は「要介護高齢者」という漠然としたイメージから、「介護保険制度の構築」、そして「ヤングケアラー支援の実践モデル」の探求へと展開してきた。

第二に、研究テーマに辿り着いた過程である。留学当初は、「要介護高齢者をめぐる〇〇研究に取り組みたい」と考えていた。中国国内で介護保険制度の試行が始まったことを受け、この「〇〇」は「介護保険制度の構築」へと明確化した。修士・博士論文では、日本の介護保険制度の歴史や改革の分析を踏まえ、中国における介護保険制度の構築および持続可能性について論じた。博士論文を執筆した際、ヤングケアラーの関連論文と書籍に触れ、「小学生から要介護状態の祖父の見守り、食事や洗濯などの家事を担ってきた自分はヤングケアラーだったのでは？」と疑問に思った。これを契機に、日本、さらには韓国、中国におけるヤングケアラーの比較研究へと研究の軸を拡大した。このような当事者性が報告者の研究の原動力となっている。

第三に、外国人若手教員としての悩みについてである。日本での就職に向けて博士後期課程に在籍しながら国家資格（社会福祉士・精神保健福祉士）を取得し、非常勤講師として経験を積んできた。しかし、「任期なし」の安定した職を得ることは容易ではない。現在、教育・研究・学内業務・地域貢献に積極的に取り組むよう努めているものの、「任期付」（在留期間の更新に係る）という不安定な身分に意識が向き、キャリア形成について悩むことも少なくない。また、社会福祉士・精神保健福祉士の実習以外に福祉現場での実務経験がない点も、自身の弱点として認識している。この実務経験の不足は、就職だけでなく、実習教育を担当する際にも不利に作用し、学生への指導の適切性に影響を及ぼしてかねないというジレンマを抱えている。

Ⅱ部：シンポジウム企画 報告者③
姜 民護先生のプロフィール

カン ミンホ
姜 民護 氏(関西大学・准教授、国際学術交流促進委員会・委員)

経 歴

職 歴

2025年4月-現在に至る 関西大学人間健康学部・准教授、博士（社会福祉学）
2020年4月-2025年3月 同志社大学社会学部・助教
2019年4月-2020年3月 大阪公立大学人間社会システム科学研究科・客員研究員
2017年4月-2019年3月 同志社大学大学院社会学研究科・外国人留学生助手
2013年4月-2017年4月 同志社大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士後期修了

委員歴

2025年9月-現在に至る International Society for Korean Studies・事務次長
2024年11月-現在に至る 日本社会福祉学会国際学術交流委員会・委員
2024年1月-2024年12月 韓国社会福祉学会アジア学術交流分科委員会・委員
2022年5月-現在に至る 日本社会福祉学会研究支援委員会・委員
2020年5月-2022年5月 日本社会福祉学会広報委員会・委員
2017年8月-現在に至る International Society for Korean Studies・編集幹事

その他 日本社会福祉学会を始め、10の学会で活動中

研究分野

キーワード：

社会的養護、離婚経験児、性的マイノリティ、自立支援、ソーシャルワーク実習指導

主な研究活動：

社会的養護における性的マイノリティの子どもへの支援実態とそのメカニズムの検証(基盤C・研究代表(共同研究))

日本が目指すべき社会的養護における制度と実践の座標軸の検証：5か国比較からの考察(基盤A・研究分担、研究代表者：伊藤 嘉余子)

児童虐待におけるネグレクト・心理的虐待のリスクアセスメントシートの研究・開発(基盤C・研究分担、研究代表者：山田 麻紗子)

日韓における離婚家庭の子どもたちの社会的・文化的貧困を断ち切るための支援モデルの開発(若手研究・研究代表)

主な著書・論文等

著書：Noguchi, K., Kang, M., and Takahashi, J. (2025) 「Current Situation and Support Needs of Children in Family Home (Family-Type Boarding Home)」In Ito, K., Noguchi, K., Furuhashi, T., Senga, N., and Cavelzani, A.(Eds.) 『Clinical Research and Practices to Support Families at Risk of Child Neglect and Maltreatment.』Cambridge Scholars Publishing. 姜民護 (2025) 「なぜ、養育費履行確保制度の強化は可能だったのか」金成垣・金圓景・呉世雄編『現代韓国の福祉事情－キャッチアップか、新しい挑戦か』法律文化社。その他多数あり。

論文等：姜民護 (2024) 「新型コロナウイルス禍における子ども家庭福祉研究の困難と可能性」『比較家族史研究』第38号。千賀則史・姜民護・山田麻紗子・渡邊忍 (2022) 「ネグレクト・心理的虐待事例における児童相談所の一時保護の判断に関する質的研究」『子ども家庭福祉学』第22号。姜民護 (2022) 「ソーシャルワーク実習教育に関する評価尺度の開発－論理的方法を手がかりとして－」『評論・社会科学』第140号。その他多数あり。

報告内容の概要

1. 経歴の紹介

- ①日本留学のきっかけから現職に至るまでのキャリアパス：本質は「研究」
- ②研究活動：共同研究に恵まれて見落としていた単独研究の重要性
- ③教育活動：重要なのは「メッセージ」

2. 外国人教員としての苦戦

- ①研究活動の側面から：フィールドを持つことからの回避
- ②教育活動の側面から：ネイティブスピーカーでないことからの躊躇
- ③その他：学校行政、地域貢献、学会活動など

3. 外国人×社会福祉研究者としての新たな課題

- ①外国人教員としての悩み：学校や学生が外国人教員である私に期待していること
- ②社会福祉研究者としての悩み：多様なソーシャルインパクトのやり方